

「今や古典：20、21世紀に誕生したオーケストラ作品10曲」

伊藤美由紀（2400文字）

同テーマの第4弾となる今回は、既に特集で扱った交響曲、協奏曲の作品を除いたオーケストラ作品10曲を選ぶ。作曲家独自のスタイルを確立し、後世の作曲家達に多大な影響力を与えた特徴的な個性を表現した作品の中から10曲に絞ってみる。

最初に現代音楽の幕開けとなったフランスの印象主義の作曲家から始める。

■ドビュッシー / 交響詩《海》(1905)

「音楽の本質は形式にあるのではなく色とリズムを持った時間なのだ」と語っている彼の言葉通りの印象主義音楽を代表とする作品のひとつで、色とリズムで海の情景を表現した3つの副題をもつ3作品。出版されたオーケストラ譜の表紙には、彼のお気に入りである書齋に飾られていた葛飾北斎の版画『富嶽三十六景』の一枚「神奈川沖浪裏」のデザインが使われたことでも有名である。旋法的な音形、全音音階の使用で東洋的な響きも感じられる。

■ラヴェル / 《ボレロ》(1928)

親友イダ・ルビンシュテイン夫人により依頼されたバレエ作品であり、スペインのアンダルシア地方の民俗舞踊およびその舞曲を意味する《ファンタンゴ》と最初名付けたものの、最終的にあの有名な《ボレロ》となる。彼自身「この作品は、特別に限定された方向での実験的な作品である」と言っており、作曲家本人の予想に反して大衆的人気を得て、現在に至るまで彼の作品中、最も有名な作品のひとつとなった。最初から最後まで執拗に繰り返され、展開されないスペイン、アラビア的な民謡風のシンプルな2つのテーマは、聴き手への感覚へと訴えかける。

印象主義以降、各々の作曲家が時代の先端となる個性的なスタイル、独自のシステムを確立していく革新の時代に突入する。その時期の異なった国籍の作曲家による8作品を作曲家の生年順にあげる。

■シェーンベルク（オーストリア） / 《5つの管弦楽曲》(1909/22)

12音技法のシステムを確立する前、調性から離脱し無調の様々な可能性を試みっていた時期の作品のひとつである。特に3曲目〈色彩〉では、異なった楽

器を通して微妙な音色の変化を生み出し、彼の『和声学』のなかで記述されている“音色旋律”を試みており、ベルク、ヴェーベルンの作品にも影響を与えている。

■ ストラヴィンスキー（ロシア） / 《春の祭典》(1913)

ディアギレフの委嘱によりロシア・バレエ団の為に作曲した、彼の初期の3大バレエ作品の最後の5管編成による大作である。“原始主義”のスタイルで、複調、変拍子、強烈なリズム、不規則な鋭いアクセントなど、異国的な素材による原色的な音色を特徴とした独自の音楽観に基づいている。「音楽は何も表現しない」と彼は言う。音とリズムで多様性を追究し、無駄のない構成で音楽に自律性をもたせた。

■ ホセ・パブロ・モンカーヨ（メキシコ） / 《ウアパンゴ》(1941)

メキシコ国民楽派の作曲家によって結成された「メキシコ4人組」の一人であったモンカーヨの代表作。「ウアパンゴ」とは、メキシコのベラクルス地方の伝統的な華麗で即興的な民族舞曲で、6/8、3/4拍子を混合したラテン・アメリカ的なリズムをもっている。現地に調査に赴き、純粋な形で保存されている民謡を収集し、その地方の有名な3つの民謡から着想を得て作曲した。軽快な打楽器により、リズムカルでカラフルな作品となっている。メキシコでは「第2の国歌」と称され、メキシコ現代作品で人気の高い作品のひとつである。

■ クセナキス（ギリシャ） / 《メタスタシス》(1954)

数学者、建築家でもあるクセナキスは、その知識を音楽作品のなかにも応用し、複雑な数学の計算により作品は構築されている。数学のグラフ図形から、弦楽器のグリッサンドの各々の傾きも計算され組織的に使用されている。その音色は、繊細であったり暴力的で攻撃的な轟音であったり、彼の経験した戦渦の緊張感を表現しているような音響であり、独自の音響世界を確立している。デビュー作であるこの作品を含む彼の功績は、京都賞を受賞している。

■ リゲティ（ハンガリー） / 《アトモスフェール》(1961)

映画『2001年宇宙の旅』のなかでこの作品の一部が使用されたこともあり、彼の名前を一般に広めた作品。彼が作品の解説の際に使用した造語“マイクロポリフォニー”という密度の高い音構造で構築されている。「トーンクラスターと似ているが、静的なラインよりも動的に使用されるという点で異なっている」と彼は述べる。48声部で全ての楽器がディヴィジで各々の音を演奏し、管弦楽器とともに素早く動くヴィブラート、ミュートの使用、特に弦楽器においては、

スル・タスト、スル・ポンティチェロ、コル・レーニョ、ハーモニクス・グリッサンドなど様々な奏法でテクスチャーごとに微妙に音色を変えていく。ピアノは打楽器的な扱いをし、弦の上をワイヤブラシなどで触れ効果的な音色を加えている。

■ ベリオ (イタリア) / 《シンフォニア》 (1968)

バーンスタインに献呈され、ニューヨーク・フィルの 125 周年記念としての委嘱作品である。8 人の混声合唱を伴い、人類学者レヴィ＝ストロースのテキスト、作曲年に暗殺されたキング牧師の名前、マーラーの交響曲第 2 番をはじめ様々な時代の楽曲が引用されコラージュされて再構成された 5 部からなる作品である。妻であったシンガーのキャシー・バーベリアンの影響で声の可能性を追求した声楽作品が多々あるが、その集大成のような作品である。

■ 武満徹 (日本) / 《弦楽のためのレクイエム》 (1957)

東京交響楽団の委嘱による初期の作品であり、ストラヴィンスキーに絶賛され国際的知名度を得るようになる出世作でもある。重厚な緊張感のある響き、印象的なモチーフなど、武満サウンドの原点となる作品である。

■ ミュライユ (フランス) / 《ゴンドワナ》 (1980)

グリゼイと共にスペクトラル楽派の創始者である彼の初期の代表作品である。鐘の音のスペクトル解析、周波数変調などの結果である複雑な音響をオーケストラで再構築している。彼の洗練された聴覚により選ばれた絶えず変容する繊細で美しい音響が特徴である。